



TITLE:

近江日野町志を讀みて

AUTHOR(S):

菅野, 和太郎

CITATION:

菅野, 和太郎. 近江日野町志を讀みて. 經濟論叢 1931, 32(2): 429-434

ISSUE DATE:

1931-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129988>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟論叢

第三十二卷 第二號

昭和六年二月一日發行

論叢

不動產貸營業の地方間課税 . . . 法學博士 神戸 正雄
幕末に於ける 幕府產物會所設立計畫について . . . 經濟學博士 本庄 榮治郎

時論

新地租方案を論ず . . . 經濟學博士 沙見 三郎
率勢米價に就いて . . . 經濟學士 蜷川 虎三

說苑

獨逸中工業金融機關との Industrieschaft . . . 經濟學士 楠見 一正
米の銘柄別短期清算取引を評す . . . 經濟學士 今西 庄次郎

雜錄

消費組合による米の配給 . . . 經濟學士 谷口 吉彦
段別割の存在理由 . . . 經濟學士 安田 元七
支那經濟の衰退とその復興問題 . . . 經濟學士 大上 末廣
近江日野町志を讀みて . . . 經濟學士 菅野 和太郎

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第二十一卷乃至第三十卷論題索引

近江日野町志を讀みて

菅 野 和 太 郎

曩に坂田、蒲生、栗太、愛智の四郡志を編纂したる中川泉三氏の補正に係る近江日野町志が最近刊行せられた。日野町志は元來池田毅氏が編纂主任となりて大正四年以來編纂に従事し、大正九年に一先づ脱稿されたが、未だ出版されずに其の儘に放棄されて居たのを先年池田氏の物故によりて中川氏が今般其の原稿を補正して印刷公刊するに至つたのである。

徳川時代商業上に大活躍したる近江商人は近江の到る處より出でしものでなく、主として蒲生、神崎、愛智の三郡より出で、而かも其の典型的の近江商人としては、八幡商人、日野商人、五箇莊商人の三者を擧ぐることが出来る。其の日野商人を出したる日野町の町志が編纂されたことは、近江商人研究上に有益なる指針が與へられたと言ふべきであらう。

日野町は人口七千足らずの渺たる町であるが、其の町志が三卷十七篇より成る大町志たる點より見れば、日野町は如何に多くの史實に富める町であるかを知るに足る。十七篇の内日野商人のことを主として記述したる部分は第九篇の商業志及び第十篇の工業志であるが、其の他の箇所に於ても商人のことに言及されて居る點は少くない。

日野商人として特に稱せられるに至りたる商人が日野町より出現したるに就きては、其處に由來する處が存在せざるを得ざる筈である。日野には中世より既に市が成立したものと見え、應永三十六年七月四日附の

今堀日吉神社文書に日野市の名が記されて居る。上下の二市があり、各商品に就き市座を成立して、市日には諸地方より商人が參集した。¹⁾ 其の後城主蒲生氏郷は天文十年十二月日野町に掟十二條を下し、以て日野町の繁榮を圖つた。即ち日野城下を樂市となして、營業の自由を保證し、諸商人及び諸商品の集散を便利にし地子等を免じて營業を有利ならしむることにしたのである。²⁾ 之がため日野町民は大に榮えたのであるが、其の後蒲生氏郷の伊勢松ヶ島城移封後は、再び立つ能はざるが如き大打撃を受け、其の大宮たる綿向神社の祭禮さへ十餘年の久しき間廢絶するが如く衰微を來したといふ。然るに圖らずも其の禍が轉じて日野商人を出現せしむるに至つた。即ち日野町民は蒲生氏を思慕するの餘り、其の移封後も、蒲生氏の城下へ往復し、其の往還の途中日野特産の漆器等を行商して、遂に日野商人の名を成すに至つたのである。³⁾

日野商人の行商品は日野産の日野椀及び漆器を主としたが、他にも京呉服を始とし、麻布蚊帳を諸國へ持下

1) 中、35頁
2) 上、25頁
3) 卷、34頁

つた。而して行商地の事情に通ずるに従ひ、其の地に
 出店したのであつて、其の出店一覽表及び日野商人出
 店分布圖を見れば、各地に如何に多くの出店があるか
 が分明する。⁴⁾而して出店の營業種目を見るに、釀造業
 が大半を占めて居る。⁵⁾日野商人が特に釀造業に従事し
 たることは、以て日野商人の特色を示すものであり、
 而かも其の出店の多くが關東地方に於て存することも⁶⁾
 特に注目する必要がある。而して中井家、矢野家の如
 き大商人は、營に一ヶ所許りでなく、數ヶ所に出店を
 有し、中井家の如きは東は仙臺より西は豊後國杵築に
 迄及びて十五の支店を有し、⁷⁾矢野家は七の出店を有し
 た。⁸⁾更に注意すべきは日野商人が徳川時代に支那貿易
 及び和蘭陀貿易に従事したることである。即ち中井家
 は天保四年以來絲割符仲間の株を有して、當時の輸入
 品たる生絲の賣買に従事し、⁹⁾上野國伊勢崎に出店した
 る若村源左衛門が文化以來支那和蘭陀よりの輸入品た
 る藥種、砂糖、染料の賣買に従事して富商となりたる
 ことは其の事例である。¹⁰⁾此等の事蹟が最近中川氏の調

近江日野町志を讀みて

査によりて明にせられたることは、同氏を大に多とせ
 ざるを得ない。

日野商人の經營方法に就きて觀察さる、第一の點は
 其の店舗の組織であつて、之は又他の商人に於ては其
 の類例の乏しい點である。即ち日野商人は主人自らが
 直接業務に従事せずして、支配人若くは番頭に營業に
 關する一切の權限を委任し、已れは多く家にありて唯
 決算報告を受くるに過ぎないのである。而して店員は
 必ず日野若くは日野附近の出身者に限られ、其の店員
 の養成に就きては日野商人特有の慣習があり、又其の
 出店に於ては全く男世帯にて、妻子は總べて日野に残
 し置き、男子のみ出店に於て活動する事を特色とする。¹¹⁾
 次に日野商人の經營上に就き觀察さるべきことは大當
 番制度である。日野商人は其の利益を助長確保せんが
 ために仲間即ち大當番を成立し、以て其の發展を大に
 促進した。日野商人が其の組合即ち大當番に加入する
 事によりて最も多く利益を得たるは賣掛金の訴訟の場
 合である。かくの如く大當番に加入することによりて

4) 同書, 466頁
 5) 同書, 465頁
 6) 同書, 502頁
 7) 同書, 608頁
 8) 同書, 416頁
 9) 同書, 79頁
 10) 同書, 3頁
 11) 同書, 9頁

多大の利益を得たるため、日野商人以外の商人即ち八幡及び京都の商人も日野商人の大當番に加入し、明和七年には其の加入者が四百三十九人の多きに達した。¹²⁾

更に日野商人の經營上に就き注意すべき點は日野商人の定宿を指定したことである。即ち日野商人仲間は東海仲仙道の宿驛に指定旅館を置き、以て行旅宿泊上に利便を享けたのみならず、商品の托送金錢の授受等總べて其の旅館に取扱はしむる便宜を得たのである。而して日野商人は其の定宿に投宿するに當りても彼獨特の慣習がありて、多くの人々に迷惑を及ばざるが如くに行動したため、到る處にて大に歓迎せられたといふ日野商人の經營上に於ける特色としては以上の三點を擧ぐることが出来るが、又此の特色があつたればこそ日野商人の名を高からしむるに至つたのである。

前に述べたる如く日野商人の多くは其の出店に於て釀造家に成りて、工業を經營したのであるが、元來日野商人と工業との間には密接なる關係がある。第一に日野なる語が檜物より發した所より見るも、¹⁴⁾日野には

往昔より漆器の製造が盛であつたことが分る。一時は日野椀として諸地方より需要せられ、日野商人の主なる行商品となつたが、天保頃には其の製造が全く絶えてしまつた。¹⁵⁾次に勃興したる工業は製藥である。日野賣藥は萬病感應丸の本家正野玄三及び井田玄泉によりて創められたるものであつて、其の後製藥は益々盛となり、漆器製造の衰亡に引換へ、今日に於ても日野町第一の物産となつて居る。日野町に於て製造されたる藥を又日野商人は諸國に行商して大成したのである。¹⁶⁾かくの如く日野町に於ては元來工業が盛であつたのであるから、日野商人が行商より身を起し、遂に大成して出店に於て釀造業に従事するに至つたことも其處に故なしと言へないだらう。

榮枯盛衰は世の常であるが、殊に其の激甚なるものは商人である。日野商人も其の例に洩れず榮枯盛衰は常であつたやうである。第二十章に載せられて居る閉店せる出店一覽表¹⁷⁾に見るに、日野商人の出店が如何に多く閉店したかが教へられる。而かも其の閉店が多く

10) 423—34頁
11) 353—7頁
12) 357—90頁
13) 390—415頁
14) 32—5頁
15) 684—72頁

同書、上、中、
同書、上、中、

明治以後に於て生じたることは、吾々の到底之を看過し得ざることである。日野商人が徳川時代あれ程に活躍し得たのは、彼等の經營方法に時代に投する何物かが存したためであつたのであるが、明治維新後に於ける社會經濟狀態の急變に際して、其の保持せる經營方法が反つて時代に背くものとなり、従つて又止むなく閉店を餘儀なくさせられたものと言ふべきではなき乎。此の點は日野町志を繙きたる日野町民の深く反省すべきものであらう。

徳川時代の俗諺に「近江泥坊伊勢乞食」と歌はれたる如く、商人として傑出したるものは近江商人と伊勢商人である。然るに伊勢商人と稱しても、其の多くは松阪より出て居り、その松阪は日野より移封されたる蒲生氏郷の城下町であつて、其の移封の際日野商人を移して市街を建設した。松阪商人として有名なる角屋、衣屋等の大富商も日野出身の者であるといふ有様で、松阪商人は全く日野商人より發したと言へる。¹⁶⁾ 近江商人と伊勢商人との間に一脈の相通するものが存するこ

近江日野町志を讀みて

とは大に興味を惹く事柄である。

明治維新の鴻業と日野商人の貢獻との關係が窺はれる記事が收載されて居ることは特に之を紹介する必要があると思ふ。王政復古當初明治新政府は財政窮乏を極めたるため、其の財政を確立せんとして三百萬兩の會計基金を調達することにしたのであるが、日野商人も其の御用金に應じて居る。即ち上は一萬兩より下は百兩に亘りて合計五萬五千九百兩の御用金に應じたことは、以て日野商人の富力を示すに足る。¹⁷⁾

明治二年新政府は内外商業の振興を圖るため、大阪西京等に通商司を設置し、其の通商司を通じて我國最初の株式會社たる通商、爲替の兩會社を設立し、各地方に商社を成立せしむることにした。日野に於ても大津通商會社に屬する商社が設立されて、合資結社の實を擧げたることは、日野商人の新企業に進出したることを示すに足るが、遺憾乍ら其の實績は擧がらなかつたやうである。兎に角商社に關する記録が比較的乏しい折柄、日野商社のことが詳細に紹介されたることは

16) 703—33頁
17) 479—84頁
18) 290—2頁
19) 136—41頁

裨益する處少くない。²⁰⁾唯憾くは編者が當時の通商、爲替會社に通ぜざるため、日野商社の性質等が明確に紹介されて居ないことである。將來日野町志を訂正するが如きことがあれば、折角の資料を十分に利用し、明治維新史上重要な意義を有する商社のことを詳細に紹介して貰ひたいと思ふ。

編者は第九稿第二十二章に於て日野商人立志傳を載せ、殊に天下の豪商となりたる中井家に就きては詳細に記述して居る。時間の不足のため、他の商人の事蹟が比較的簡略に紹介されて居るが、例へば矢野家、辻家、野田家等にも紹介さるべき資料が多く保存されて居る筈であるから、出來得べくんばそれ等の人々の傳記も詳細に紹介して貰ひたいと思ふ。兎に角詳細に紹介されたる中井家の傳記によりても日野商人の活躍に就きて教へられる點は少くない。中井源左衛門良祐が享保十九年一介の行商人として身を興し、僅々二十餘年後には既に日本國長者番附に其の名を刻するに至りたるが如きは、日野商人の面目を躍如たらしめて居る。

同家の記録によりて、同家が奥州より生絲を仕入れ、それを西陣織及び丹後縮緬の原料として供給したる事蹟が明にされて居るが、それによりて西陣の發達と近江商人との關係が大體窺はれる。徳川時代諸大名は富商よりの借財によりて辛くも其の財政を立てたのであるが、仙臺藩も其の例に洩れず中井家の援助によりて其の財政を彌縫して來たことが同家の記録によりて示されて居る。即ち中井家は大阪の升小に代りて仙臺藩の藏元となり、仙臺藩のために用達したる金子は一時百萬兩以上に達したのである。尙同家の記録によりて其の他徳川時代に於ける商業狀況を知り得る點は少くない。²¹⁾

以上は大體日野商人の立場より日野町志を紹介したのであつて、吾々は日野町志を繙くことによりて日野商人の活躍を十分に研究することが出來、延いて徳川時代の商業史の一端を明にすることが出来る。唯遺憾に思ふことは日野商人の事蹟を記述せる部分が日野町志全體に對して、其の占むる頁數の少いことである。

²⁰⁾ 同書, 447—59頁
²¹⁾ 同書, 496—72頁